

美術の窓 (107)

ギリシャ・コルフ島の日本美術調査

大和文華館館長 浅野秀剛

今年の7月下旬、ギリシャのコルフ島にある、ギリシャ国立アジア美術館の日本美術の調査に参加した。日本の美術と文化を専門とするイギリスのセインズベリー研究所と出光文化福祉財団の助成で組まれた調査団は、日英米からなる総勢17人という大人数となった。私を含む日本からの参加者の主力が成田を出発しロンドンに向かったのが7月20日。翌日の午後、大英博物館で顔合わせと打ち合わせを行った。コルフ島行きの飛行機は22日の夕方なので、時間はたっぷりある。私は、自由時間のほとんどを、大英博物館内をうろうろして過ごした。普段、人が多くて敬遠していたエジプト・ギリシャ・ローマの展示室を、今回はゆっくり見えたが、その壁に掲げられた略年表を見て少し奇異な感覚に襲われた。紀元前数千年から始まっているのはよいとしても、紀元後は500~600年で終わっていたからである。そこから現代までの千五百年間、エジプト・ギリシャ・ローマには、特記すべき文化がないような印象を覚えた。大英博物館に他意がないのは分かっていた。その一画は古代のエジプト・ギリシャ・ローマ文明・文化を展示するエリアであるからである。しかし、もし私がギリシャ人であったら、「ギリシャの近代にも現代にも文化はある」と呟いたかもしれない。幸い、日本や中国・韓国のコーナーにあった年表は現代まであったので少しほっとしたのは事実である。美術館・博物館に勤める私たちは、そんなところまで配慮する心を求められているのだと思う。

地下鉄の最低料金が2ポンド(400円強)という物価高のロンドンに別れを告げ、コルフ島に着いたの

は、22日の22時30分。時差があるのでロンドン時間では20時30分。ディスピーナ・ゼルニオティ館長らの歓迎を受け、当然のようにそれから夕食となった。夕食は、海岸に設営したテントの中。とても食べきれない量の食事が終わったのは夜中の1時を過ぎていたように思う。その日が特別なのかと思っていたら、そんなことはなく、9時に調査開始、14時30分終了、15時昼食、そして自由時間、21時夕食、というのが次の日からのスケジュールであった。昼食と夕食はたっぷり時間をかけ、その間に昼寝や海水浴をどうぞというのである。過密な食事のスケジュールに、3日目くらいで皆音を上げ、会食の回数を大幅に減じてもらったのは幸いであった。

23日から調査を開始した。調査は絵画班・版画班・陶磁器班に分けて行った。私は版画班である。最初は、学習院大学教授・小林忠先生らによる昨年の予備調査で確認した東洲斎写楽の肉筆の扇面画「四代目松本幸四郎の加古川本蔵と松本米三郎の小浪」を、絵画版画的両班で調査した。その結果、扇面画を写楽の真筆と認めてよいのではという結論になったことは新聞やテレビで報じられたとおりである。現在、写楽の作品をどこまで認めるかということについて、研究者の意見は分かれている。最初に刊行された大判の役者大首絵(半身図)28枚以外は写楽でないという極端な意見はともかくとして、役者絵と相撲絵計142枚を写楽と認める説、それに武者絵2枚を足して144枚とする説、「恵比寿」も含め145枚とする説などである。肉筆画については、研究者が一致して良いという作品は1点もなかった。

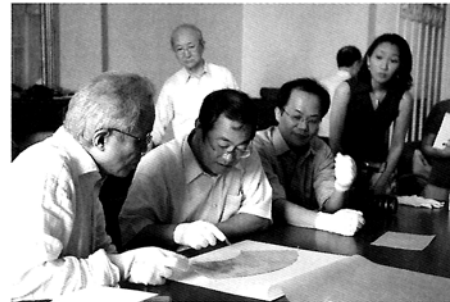
そうした状況にあって、その作品の出現は非常に大きな意味があるといえてよい。しかも、コルフ島。およそ100年前、ギリシャの外交官・マノスが収集し寄贈したコレクションの中にあつたのである。その扇面画は、1795年5月の江戸・河原崎座で上演された「仮名手本忠臣蔵」の二段目に取材した作品と考えられる。それは写楽が版画の刊行を停止した数ヶ月後のことであり、版画停止後の写楽の活動の再検討を迫ることとなったのである。

一日目は、写楽の扇面画のこともあって、版画班の調査点数は73点であった。版画作品は全部で1,500点余と聞いていたので、このペースで行けば、残り4日ですべて終了させるのは絶望的である。そこで、大幅なスピードアップを図るため、写真で分かることはその場で記録しない、調査する必要のない作品(近代の複製品など)は、その旨を書いて調査から外すということにした。そして、調査は、所蔵番号、寸法、写真撮影と所見(複製品の可能性、加筆の有無など。特別なければなし。)のみとした。その結果、24,25日で合計648点の調査を終了した。おかげで26日の土曜日は調査こそしなかったが、版画班は一日中データ整理に追われた。28,29日の調査分のデータ整理は帰国後となったが、方針変更が効を奏し、全版画作品を調査することができたのである。

27日の日曜日は安息日?。二艘の船に分乗して島の周囲巡りと海水浴に連れて行っていた。コルフ島は、南北およそ50

キロ、東西は5~20キロの細長い島で、人口は10万人。アニメの「風の谷のナウシカ」で日本でも馴染みとなったナウシカの住んだ島でもある。有名なリゾート地で、夏季は20万人も増えるという。我々のホテルの前も夕刻は銀座並みの混雑。とても暑いと聞いていたが、滞在した時はなぜか涼しく、湿度も低く、ホノルルのような気候であった。ギリシャ最北の島で、西北に行けばイタリアの南端に、東に二キロも行けばアルバニアの海岸に到着する。ギリシャに比べ、アルバニアの国土は荒れているという。船からではその詳細は知れなかったが、大小のレジャー船の行きかうギリシャ側から樹木の少なそうなアルバニアを遠望すると感慨ひとしおであった。島の東から北の海岸の絶景と紺碧の海を堪能し、二箇所の海岸で私も泳いだ。船から降りて昼食。一人に半匹の伊勢海老も出て、大満足の日であった。

ロンドン経由で帰国したのは31日である。一年前までは、浮世絵の調査でコルフ島に行くことができるとは夢にも思わなかった。世界に散った日本美術によって得た僥倖に心より感謝したい。



季刊 美のたより No.164

平成20年10月11日

発行 大和文華館